

石神遺跡(第18次)の調査

—第140次

1 はじめに

石神遺跡は、須弥山石や石人像の出土や位置の記載から、『日本書紀』にみえる饗応施設にあたるとの説が有力である。調査の結果、三度の大きな遺構変遷があったことが明らかになってきた。

飛鳥藤原110次(石神遺跡第13次調査、2000年)、同116次(14次調査、2001年)で確認された東西堀と溝による区画施設の北側でおこなわれた飛鳥藤原第122次調査(石神遺跡15次調査、2002年)、同第129次調査(石神遺跡16次調査、2003年)、同134次調査(石神遺跡17次調査、2004年)では、建物や堀といった建造物の存在が希薄な状況が確認され、代わって主に南北方向に延びる溝が複数存在することが明らかとなった。これらの遺構からは木簡や木製品をはじめ多量の資料が出土している。

今回は飛鳥藤原129次(石神遺跡16次、2003年)の北側隣接地を対象とし、石神遺跡北側の土地利用の実態の解明、存在が想定される水路の性格および遺跡の北の境界として想定されている阿倍山田道の確認を課題として調査を開始した。

2 調査の概要

調査は2005年10月1日より開始し、途中中断をはさみつつ、2006年5月1日に調査を終了した。調査面積は625㎡である。

調査の途上であるため、ここでは概要に留め、詳細は次年度の紀要において報告することとしたい。

遺構としては16次調査で確認された南北溝SD1347、SD4090、SD4121が確認できた。また、SD1347の下層の南北溝SD4127の検討から、各次数の報告において想定された遺構変遷の再検討が必要になっている。

SD4090の下層からは、杭列や溝護岸の可能性のある石組を確認している。これらの遺構は、正方位を向いておらず、現在その時期と性格の検討をすすめている。

溝からは豊富な出土遺物が出土しており、木簡、木製品、金属製品、土器、瓦等がある。

木簡の中には『観世音経』『聖』と記載されているものが存在し、『寺』の記載のある墨書土器がある。

銅製および木製の人形、斎串、舟形木製品、鳥形木製品といったものは、祓等の祭祀に関連する遺物と考える説が有力であり、飛鳥池遺跡における銅製人形の出土とならび7世紀後半以後盛行する祭祀形態の出現期の状況をうかがわせる上で貴重な資料と考える。(金田明大)



図94 石神遺跡(第18次)調査区全景(東から)